はっとする鮮やかさ 緑青ブルーの店舗演出

三越新潟店のファッションフロアのなかでもひときわ印象的なブティック「ヨーガンレール」。その壁面は緑青をふいた真鍮板に覆われている。陳列された洋服や小物は緑青ブルーにひき立てられ、美しく、洗練された印象を放っている。

ヨーガンレール三越新潟店
写真／「コンフォルト」2005年2月号（建築資料研究社）より転載（撮影／梶原 敏英）

同店の店舗設計にたずさわったインテリアデザイナー・関洋氏にお話をうかがった。

「天然素材を使い服づくりを行うヨーガンレールは、糸一本一本に至るまで素材に強いこだわりを持っています。服を着ればそのこだわりがわかると思いますが、私は店という空間でそれを伝えたいと思うのです」と関氏は語る。

同店の店舗を多く手がける関氏は、常に素材にこだわって店づくりをしてきた。とくにその土地の産物や職人の技術など、地域の素材を取り入れる試みをしており、新潟店を手がけるにあたっては、近県の梵鐘や仏具などの銅製品で有名な高岡市（富山県）に着目した。

「高岡に実際訪れてみて、鮮やかな銅の緑青に目を奪われました。機械ではなく、自然にできる緑青は工業製品が並ぶ百貨店の中でひときわ映えるだろうと思いました」

関氏は内装に銅の緑青を使用するにあたって、緑青に自然の色ムラを出し、素材の持ち味を生かすことを試みた。

「同じように仕上げなくていい。この注文は職人を混乱させたようです」

関氏は、のっぺりとした印象ではなく、素材の持つ奥深さを表現したいのだと何度も説明した。高岡ではイメージの色に近づけるため、さまざまな発色方法と素地銅板との組み合わせが試みられた。試行錯誤の末、職人の手により丁寧に加工された真鍮板は、自然なムラを持つ、鮮やかなブルーに仕上げられている。

緑青をふいた真鍮板は一枚一枚店の壁面にはられた。使用された真鍮板（一・二ミリ）は八〇〇枚以上。「壁ができ上がったとき、その仕上がりにゾクゾクした」と関氏は言う。現れた緑青ブルーの空間はモードを感じさせる新たな印象を持つ。長く伝統工芸品の世界で活躍してきた銅は、アーティストの感性によりモードの世界に登場したのである。

今回の試みには、高岡のすぐれた銅加工技術が深く関わっている。アーティストの感性を満たす豊富な銅技術が日本には存在する。関氏はもっと多くのアーティストがそれに出会う機会が必要だと語る。新しい銅の発展には、すぐれた銅技術との出会いがカギとなる。現在、高岡ではアーティストと銅職人による新しいものづくりが始まっている。

セキデザインスタジオ　関（せき） 洋（ひろし） 氏

デザイナーのイメージに近づけるよう、真鍮板に硫酸銅の溶液を布で叩きつけ、乾燥を繰り返し、緑青のムラを出し、さらに日本画の絵の具としても貴重な天然緑青の顔料で補色する方法が取られた。（写真は試作品の一部）